

## 水戸藩の南朝革命構想の源流は家康の残した「公家法度」にある

徳川幕府を開いた家康は天皇を廃止しなかつただけでなく、「徳川幕府が時代の要請にあわなくなったら、密かに南朝の天皇家を皇位に立て、そのもとで徳川家の存続を図る」という有事の際の南朝革命戦略を持ちあわせて、政権を後世に引き継いだ。その書が「公家法度」で、水戸藩による南朝革命は、この「公家法度」を源流にしている。

明治維新がさも素晴らしいかの如く、後世に伝達されたのは、薩長の陰謀（実は、裏で支配していた英国フリーメーソン）で、事実、勝海舟や西郷南洲などが、明治維新は、はっきりと間違いだったと述べていることでわかる。勝は、内乱を防ぐためには仕方なかったと述べているし、西郷は、征韓論の濡れ衣を被せられ、政敵大久保に西南戦争で殺されてしまう。

では、勝や西郷は、なぜ、明治維新は失敗だったと述べたのか？

「二人で一人の明治天皇」という松重楊江という人の本を読めば、明治維新がよくわかる。

家康というのは、馬鹿ではないから、豊臣政権を滅ぼした際に、徳川幕府が滅亡することを十分に想定していた。徳川御三家と呼ばれるのは、江戸の本家、尾張藩、紀州藩で、水戸藩は除外されていたという。除外されていた理由は、水戸藩が、尊皇攘夷の思想を持つことからわかるという。水戸藩は、代々、将軍の後見役でもある。

『家康の残した「公家法度」の真義は、「徳川幕府が時代の要請にあわなくなったら、密かに南朝の天皇家を皇位に立て、そのもとで徳川家の存続を図れ」という意味をもっていたという。

そのために、徳川家に懇意な天皇を、当時は、玉（ぎょく）といていたようで、幕府が隠しもっていたのが、後の東北連合の熊沢天皇だったというのである。会津藩が薩長にあれほど抵抗したのも、玉を囲っていたからだと思われるわけだ。

つまり、外様藩に革命をやられる前に、幕府自らが革命をやっしまえば（勿論、仮想のものだが）、外様に先を越されることなく、幕府に都合よく進むというわけなのだ。

家康は、朝廷の盲点を見抜いていて、朝廷が、幕府の意向を聞かないときは、南朝を持ち出して、朝廷を揺さぶることを念頭においていたわけである。この実行部隊が、幕府の隠密で、水戸藩とつながるようである。このような話が、水戸黄門の諸国漫遊記につながったのだろう。

水戸藩の藤田東湖は、天下の情勢を鑑みて、南朝革命の指令役を担った存在なのだろう。幕府存続に懇意な天皇なら、公武合体で、反意なら、熊沢天皇を嬢して、慶喜を将軍につけ、南朝革命をして、後に伊藤が大室で長州幕府として行ったように、幕府を存続させる手筈を整えたというわけで、藩主斉昭が、先頭の頭目になって、慶喜を送り込み、その道筋をつけようとした。

対照的に、外様長州の吉田松陰が、西の藤田東湖といわれる所以で、松陰は、南朝の落胤の大室を玉として、長州幕府を立てることを構想する。明治維新後も、長州の藩主は、伊藤に、自分はいつ将軍になれるのか、と聞いたという笑い話があるそうである。

「るいネット」より